

# インドネシア日本語学習者の言語学習状況調査と語彙学習調査 —アンケート調査による結果と分析—

AGUS SUHERMAN SURYADIMULYA (PADJADJARAN UNIVERSITY)

広瀬英史 (静岡文化芸術大学)

石井文司 (株式会社ランス)

中原茂樹 (株式会社ランス)

## 1. はじめに

### 1.1. 研究背景

語彙教育は言語教育の中で後回しにされてきた。

'Second Language Vocabulary Acquisition' に関して

Michael West(1930)がよく引用されるが、この当時と

変化がないまま 21 世紀に至っている。

第二言語教育では、語彙習得の重要性は多くの

人の認めるところである。Nation (2001) では、英

文読解において未知語が延べ語数の 2% (5%とも)

を超えるとテキストの内容理解は困難であるという。し

かし、学習者の語彙習得に関する見解は、学習者の

興味や勉強時間、記憶力の差などにより習得の差が

出るなどである。そして語彙習得の方法は、主に学習

者の自主学習によるというのが現状である。授業で語

彙を扱うとしても、「読解」クラスで触れるか、「多読」を

中心とした課題で新出語を取りあげるかくらいである。

または、検定対策問題集での「語彙」問題に限られる。

このような語彙教育で語彙の本質 (語彙の性質) を

学ぶことはできない。

上記のような状況に陥っている要因は、語彙研究

の遅れと構成要素である単語数の多さにある。たとえ

ば日本語の場合、文法の構成要素はせいぜい数百

であるが、語彙 (上級) では 1 万語の単語が必要と

なる。

しかし、現在、コーパスによって語彙研究が進展して

きた。multi-word units が明らかになり、collocation や

chunk などが学習の中心として取りあげられるようになってきたのである。特に、英語教育においては「語彙教育」を重視する動きが見られるようになってきた。ただ、日本語教育においては、まだまだ、「語彙教育」に変化が見られたとは言い難い。

## 1.2 本発表の目的

こうした状況で、語彙に関するアンケートとテストを実施し、その結果を出すことで、教授者と学習者に語彙力を正確に把握する指針を与えることができると考えた。また、教授者にとっては、学習者の具体的な語彙力が把握できることで、語彙教育としてどのようなことをすれば良いのか、どのような力を付けるための指導をすれば良いのか等の参考にできると考えた。

本発表は、インドネシアの日本語学習者を対象とした日本語学習アンケート結果と分析結果を報告することが主たる目的である。

## 2. 本調査の意義

### 2.1. アンケートについて

アンケート期間：2016.01.21-2016.05.03

調査対象者：インドネシア人日本語学習者

アクセス数：1639

有効回答：928

調査方法：Web アンケート

調査項目：学習歴／日本語能力試験レベル／日

本語学習時間／学外での日本語学習時間／日本

語とメディアとの関わり／辞書する質問／語彙習得

／日本語学習の動機／日本語能力試験に関する

質問

広瀬英史と石井文司がアンケート項目の選定を行い、中原茂樹がWebでアンケートが実施できる環境を整えた。そして、アグスがインドネシアでアンケートを実施した。\*1

### 2.2 アンケートの意義

以下、アンケート結果と分析の意義について述べる。

〔表1〕

		人数	合計
1. 性別	男	249 ( 26.8% )	928
	女	679 ( 73.2% )	
2. 職業	高校生	53 ( 5.7% )	928
	大学生	786 ( 84.7% )	
	社会人	88 ( 9.5% )	
	回答なし	1 ( 0.1% )	
3. 日本語学習歴	1年	113 ( 12.2% )	928
	2年	112 ( 12.1% )	
	3年	275 ( 29.6% )	
	4年	184 ( 19.8% )	
	それ以上	242 ( 26.1% )	
	回答なし	2 ( 0.2% )	
4. JLPT	N5取得	117 ( 12.6% )	928
	N4取得	207 ( 22.3% )	
	N3取得	210 ( 22.6% )	
	N2取得	73 ( 7.9% )	
	N1取得	18 ( 1.9% )	
	取得なし	303 ( 32.7% )	

1) インドネシアの詳細な調査がこれからの日本語教育を考える上で、貴重な資料となる

Japan foundation「2012 年度 日本語教育機関調査 結果概要（抜粋）PDF」（p6）によると、インドネシアの日本語学習者は国別では中国に続いて第 2 位であり、2009 年の調査より、21.8 ポイントも増加している。インドネシアは、地域言語の数が多い国であり、小学校で公用語としてインドネシア語を学び、またさらに、英語も学んでいく。多文化社会であり、多言語社会であり、マルチリンガルな人々が多い国である。インドネシアでの詳細な調査は、これからの日本語教育を考える上で、貴重な資料となる。

本調査では特に辞書と語彙に関して調査した。

2) 語彙の学習に関する状況調査

語彙の習得に関してどのような学習をし、どのような

日本語との接触をしているのかについて調査した。これによって、語彙習得の授業、教材、学習環境を創り出していったらよいかについて考える上で、貴重な資料となる。

3) Web 辞書作成に関するニーズ

日本でも英語を中心としながら、Weblio をはじめとして無料の Web 辞書やアプリがつけられている。こうした中で、現状でどのような使用状況であるのか、また、利用者がどのような記載を辞書に求めているのかについて調査した。

今後、どのような辞書を開発したらよいかについて考える上で、貴重な資料となる。

### 3. 分析結果

詳細に関しては別稿を設けるが、ここでは顕著な特徴について指摘する。適宜統計処理を加えて検討した結果を示す。

#### 3.1 メディアとの関わり

メディアとの関わりに関して、かなり顕著な差が出ている。

〔表 2〕メディアの 1 日平均視聴時間

時間	回答 なし	0~ 15分	15~ 30分	30分~ 1時間	1時間~ 1時間30分	1時間30分 ~2時間	2時間~ 2時間30分	2時間30分 ~3時間	3時間 以上	合計
1.日本語 ドラマ	0	213	130	179	120	111	54	49	72	928
	—	23.0%	14.0%	19.3%	12.9%	12.0%	5.8%	5.3%	7.8%	100%
2.日本語 パワエ ティ	1	398	184	150	65	51	25	22	32	928
	—	42.9%	19.8%	16.2%	7.0%	5.5%	2.7%	2.4%	3.4%	100%
3.日本語 アニメ	3	272	108	156	99	96	51	31	112	928
	—	29.3%	11.6%	16.8%	10.7%	10.3%	5.5%	3.3%	12.1%	100%
4.日本語 ニュース	1	684	156	60	17	7	1	1	1	928
	—	73.7%	16.8%	6.5%	1.8%	0.8%	0.1%	0.1%	0.1%	100%
5.日本語 関連ネッ ト・SNS	0	369	272	139	64	30	19	11	24	928
	—	39.8%	29.3%	15.0%	6.9%	3.2%	2.0%	1.2%	2.6%	100%

〔表2〕から、成分分析によって、①「ドラマ」「アニメ」、②「ネット・SNS」、③「ニュース」の3つに分類できる。③「ニュース」に関しては習熟度とは無関係に学習者にとって興味の薄いものである。これを授業に取り込むことは、レアリアとしての効果は考えられるとしても、学習者の興味につながるかというこの結果からは疑問である。これと対象的なのが②「ネット・SNS」であるといえる。

①「ドラマ」「アニメ」に関しては、みなさんの経験や感覚どおりで、コアなファンは長時間の視聴をしており、②③に比べると短から長時間まで帯状に広く広がっている。これを使用した教材は好き嫌いが出てしまい、教室のみんなが興味を持つものという点では難しいといえる。

### 3.2 辞書に関する質問

アンケート前では Web 辞書の充実を考えていたが、アンケートを行ってみると、学習者の使用辞書は大半がスマホのアプリである。スマホの急速な利用が増えている。質の良いスマホアプリに対応した辞書の作成が急務である。

学習者の辞書の使用場面を見ると、「授業」「宿題」が多い。辞書を使って正しい意味を理解させるためには授業と先生の役割は不可欠であるといえる。

また、「ネットの記事を見ている時」の項目で辞書使用率が高い。日本語能力が高くなるほど、この割合が増えているのも特徴的である。利便性の高さ、関心度、嗜好の多様化に応えられる等のネットの特徴が、今後の辞書使用と語彙習得の鍵となるであろう。

### 3.3 語彙の習得

ベネッセ教育総合研究所(2014)の中高生の英語学習に関する実態調査に関する報告書に、「英語を勉強する上で大切なことは何だと思えますか」(複数回答可)の質問に対して、1位「英語でたくさん会話をする(中学生 53.4%、高校生 59.8%)」、2位



そこで、成分分析を行ってみると、「1 日本の文化や社会をもっと知るため」「2 本語自体に興味があるため」「5 日本人と会話がしたいため」はレベル差によらず目的とする項目である。他方、「3 将来日本に留学したいため」「4 日本のTV番組やアニメなどを理解したいため」は習熟度が高い学習者になると大きな目的の一つとしてあげる項目ではなくなるようである。

#### 4. おわりに

今回指摘したのは、アンケートの一部である。このあと、さらに詳細な分析を行う。  
また、今回のアンケート結果は、WEBにて公開の期待されたい。

\*1) アンケートの実施にあたっては、八田直美先生（ジャパンファンデーション）、アムリ先生（スラバヤ大学）、イスマトゥル先生（ブラウイジャヤ大学）、ソニ・ムルヤワン先生（ウニコム大学）、スシ先生（ウピ大学）、ベティ先生（サラスワティ外大）、ヘル先生（サラスワティ外大）、ダニー先生（元ウイディヤタマ大学）をはじめ多くの先生方にご協力をいただいた。

#### 【参考文献】

Michael West.(1930) peaking-vocabulary in a foreign language. *Modern Language Journal*.14: 514  
Nation.(2001) Learning vocabulary in another language. *Cambridge University Press*

ベネッセ教育総合研究所(2014)『「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」速報版』・木村治生編 ベネッセ

セホールディングス ベネッセ教育総合研究所・2014年10月1日・P15